



再々
開
之
書
梅

五

13
3153
5



待
3153
5

再興高野梅卷之五

外山古市に坐る大光寺佛糸の法

栗杖 卯著



去程より外山へ登り小糸河方一連の山をめぐりて思ふに作坊樹の
か道と急し内程か山岡の町小糸を分け及船は去年七
九郎同夜して糸より糸良(来り)及るは妙見町入
吉野屋が茶して心と思ひたる人の糸と水の流定まぬ物
へるし去年は不して旅宿せしと再びけ不(法)向(き)川
まけの舟と成るく来らんといと糸舟の浮沈を定り子不
けるしふくも多し旅宿し古市の書機(来り)亭主と思し
き若しゆい挨拶(来り)今よりけ方よて執らる(下)し侍

小立かゝる元より有他の庄八道々金銀と惜まらんかひる程
 其自由の元方よりさぬくと無じて十六日馬場へ送る小其
 群集夥しくけ祭りの賣物お徳の府お墨画の馬と書る
 と山のしと持物賣と貴賤のそひ調事おへし又白き
 と紙お包お粉おまごへ獲防と負おふりしお粉おなぞら
 家おししと持物の小とるにそおえん庄八お墨画のしる
 西仲よもくおるが庄八中へお徳の伯母おしりて女神
 うりうるお粉おししと持物の小とるにそおえん庄八お墨画のしる
 少ておししと持物の小とるにそおえん庄八お墨画のしる
 新敷の夕暮に津の町へ立寄り十八日乃夕暮に古市へそ
 くりしりし

お徳の伯母おしりて女神

叔おえんお徳の伯母おしりて女神
 思ひにやしもお徳の伯母おしりて女神
 男と連て大光寺へ後墓の掃除まじりてお徳の伯母おしりて女神
 てけお徳の伯母おしりて女神
 うけお徳の伯母おしりて女神
 母お徳の伯母おしりて女神
 取お徳の伯母おしりて女神
 のお徳の伯母おしりて女神
 お徳の伯母おしりて女神
 お徳の伯母おしりて女神





お主人七九郎
 葉子一重代
 刀手子入子園

其具也ゆりたるおえんは八小雲々のいふに
 うき今のお振をわらひしは後うたさるまきやといふは八
 事武士の娘もさうさうぐ報氣の上くる様しき動成り
 馬今その二刀をぬく細ははる末の魂と石の傍小雲の
 不しきと中おていと縁しやうたつよのわり結る八小雲
 糸腰と片ときも誰かかすの物名小雲腰
 ころあうけ服をたわじとるさうい其子小雲はは男一人の
 と首のうけらさび一考し事れさき性なりと家の由も
 おえん小雲のいふおえんは三代の振を母ひは小雲の款
 討つ際おあうと天もよる大地してほび勇事たうさうは

店八のおえんのかと志るはほぶと扱かすの傍物と笑てほぶ
 事やうの世正月小雲と某物好は梅一きさいの斗ほぶんと云
 多ぶこそ思かほ

おえん若八小雲をこと明と款の約束と知る法

おえんは三代の服を母ひは小雲の事限かし扱を若八のお縁
 が零落しきりしと憐れ人の誠の時うと女房小雲物ほぶと
 折ふし附屋かして妻ももきりしと意は小雲を答無きは款
 希るる貞かろりおえんは日ひ候まうと一兩日打伏居ると
 も毎日見回しはあり業をさうも法一誠の娘のさうさう
 も言はより其り二階の親屋よりさうさうぐ女抱しはは小雲
 枕とよわし候ころまはし水業トトさるまきまう付しははいつ

ぢやいぬ世一とさんと存もも大切の事加うつふやがていそまうて
 へるせーろく減家又香は新在真柄の隣家江田那彦小討は火院
 市の室と益まきまは方とと欲と尋那彦はけ不うて病死せ九
 高が悪針あくか川とけの浮身と沈しと落もろく語うとけ
 八作天て勢も物もまざりしうおれた柄の事小や私とてその
 江田那彦へる人の欲と種ういふも由縁の身の上力よはせせめ
 情も助ふかしく欲と付せんと道不の楓樹の師匠(幼少よりきい
 百姓の入る事と人の勢ふをかろくは持の二もて免させ一其心
 此れ其沢の私大坂を改府へ参り今川家の家中岡村信内と
 人の方又中間なまはせせーが五人外より格別目とけ呉らま
 ようれ那彦火院市と持参り今川家へ抱らまはれと若一これ訓法と一入

仁易主人信内と兄中同然なりが妻女と不義うり一と殺し信内
 殺す一切うけらまき一と強奪の那彦那柄の殺もせば信内を切
 殺しそ物より大層いふ私事一年切の中間なまはるまじも主
 人目とけ呉らまき一此一入を参り存何年して信内居の當に信
 と報ひたおれども力小なりは由縁夫婦後世人をもけまは私計
 日向い一ゆたまは私もあも主人の欲とていふも由縁信持お
 下おろくハ廓と抜出た情と由供させ雪の果とも那彦が那彦
 勢も下と初うらう一とけおえんも再ひ勢とて扱く其火院
 市よよ出せ一那彦も改府も大層せ一とけ信内が削村よ
 信内せ一其後の事うんにもせよかおれよつるぐれてを
 信内とてまはるまき一何れも先心と付らまはしよと志や一合

五月一日もさうさうに
 んと引えらうらうら
 とやうな其れ程の
 つまはるる増と
 程引はれは村内
 ても運るらうら
 て又うらうらと
 来て刃を渡せり

況え一なる扱も
 況も其上欠落せん
 と固て怒り十二か
 一ツは借法と引
 外山と赤の借法
 赤の借法の淵
 大坂は替に
 長父を
 別

圓中もさうさうに
 外山と赤の借法
 赤の借法の淵
 大坂は替に
 長父を
 別



扇屋の時代
 善八方へ参る
 と尋ね来る
 四

扇屋の時代
 善八方へ参る
 と尋ね来る
 四

ひとす不中々ましくは戸子あてはぢるは戸源川邊のうぐす女所
 多くはいつやは清せんつと家よらいつせぬきかろうへきて
 は戸いせいよらういほるまじは戸へづのひんそのや
 けりくろよ富士川清水よそを流るるははゆるうそく浦
 系宗よとゆりくるされと不く極里とそく合とら路
 用のよひさくかり川よとらうまに結してけりくる
 よ縁宿のともうよま流の士それゆ川よとらうまに連る
 くるは清せろ路用よ魚名敷とらんとつて流るるまは妻
 よや思ひまへん其えいけこの人よけ何國一敷や只今う
 けうまのまへ宿よきのとて志敷とらんといら定て川
 ぬらんぎるる一賤く育ぬんと見とけけり何高實とけ

さうやと思ふはぬまは清七女流未だぬとよし影る屋同ま
 さ身のよしぬさん私へ南極やと刀無活よとぬまは
 持放地火うけけく落ふま志敷と愛代や宿後と拂
 ぬのうしうりりゆとあるまごつて流るよ女士母とそ
 是刀無活よ耳よりのとらう系のお別よ系た家の家系
 系新六とらふそのう今が強別今川家の系室切丸のた
 ちよん氏政洋見けりおとせ其馬よとこの方よとら
 ぬよ今川家へ使ふおとらとち刀のいんと借用してゆ
 この馬よときけりなき無活うけまはむとらゆら思
 其元よ面今よれ事のゆきよこのぬを刀すかま
 焼又まてうららる事うらるまよとけりよ清せん
 けり

女と尋ねつゝいふまゝとて男の魂よりいふ事ハ時長も有ん
と日敷忠勲と勵し
再関高臺梅卷之五

鬼卯作

夕霧書替文章

全五册

おろく 幸ゆ 戀夢艦

前篇三册 後篇五册

北雲画

繪本玉藻譚

全五册

馬因画 在原州紙

全六册

速水春曉齋画

繪本一休譚

全六册

馬因画 和漢の染分

全五册

速水春曉齋画

一休為むし

全六册

馬因画 螢狩宇治奇聞

全六册

